横浜植物会
会報
第265号
Vol.55,No.2
事務局　〒244-0802
横浜市戸塚区平戸5-32-41　渡辺 重彦 方
Fax 045-825-2460　〒振替口座　0280-2-13074
E.mail:yoko.syoku1909@gmail.com
令和6年5月1日(2024)
横浜植物会ホームページ　http://yoko-syoku.sakura.ne.jp/（変更しました）

ヤンバルハコベとオムナグサ

会長　勝山輝男

創立100周年記念誌『横浜植物会の歴史』に「ヤンバルハコベとオムナグサ」(勝山, 2009)と題した小論を書いた。当時、ヤンバルハコベ *Drymaria diandra* Blume とオムナグサ *D. cordata* Willd. ex Roem. et Schult. var. *pacifica* M. Mizush.の区別がはっきりせず、ネットでも両者が混同して掲載されていた。そこで、文献と標本を調べ、両者の区別点と国内分布を整理した。

ヤンバルハコベは花蕾が倒卵形で先は鈍く、萼片は中肋に沿って白色の腺粒が密生し、小花柄は上端まで腺粒が密生、1個のさく果中に1(～2)個の種子を入れ、種子は直径約1.5mmである。日本では南西諸島に分布し、熱帯アジア、熱帯アフリカ、オーストラリアに分布する。

一方、オムナグサは花蕾が長楕円形～披針形で先は尖り、萼片の背面は平滑、小花柄は上端1mmほどを除いて白色の腺粒が密生し、1個のさく果中に7～8個の種子を入れ、種子は直径0.7～0.8mmである。南アメリカの太平洋側原産でハワイに帰化し、日本では小笠原諸島や伊豆諸島に古くから帰化し、最近は南西諸島にも侵入している。時々、本州で記録されるが、多くはすぐに消滅してしまう。

ヤンバルハコベとオムナグサは茎、葉、花序などはほとんど同じで、花(蕾でも良い)や種子がなければ区別がつかない。平凡社の改訂新版『日本の野生植物』(門田, 2017)のヤンバルハコベ属の種への検索表では、オムナグサの花は葉腋に単生し、ヤンバルハコベは集散花序に数花をつけることも区別点にしているが、オムナグサもヤンバルハコベも集散花序に数花をつけ、花序は区別点にはならない。両者の区別には、萼片の白色腺粒の有無または種子の大きさを確認する必要がある。

勝山(2009)を書いた頃、オムナグサは八丈島、青ヶ島、小笠原諸島、屋久島、奄美大島、石垣島で生植物を観察していたが、ヤンバルハコベについては生植物を見る機会がなかった。2015年2月に沖縄本島の名護市勝山から安和岳・古巣岳登山口まで歩いたとき、幸運なことにオムナグサとヤンバルハコベの両方をほぼ同時に観察することができた。オムナグサは勝山支所近くの農道路傍の1ヶ所に小群が生えていたが、ヤンバルハコベは登山口付近のシークワーサー畑の林床一面に生えていた。

2024年2月に9年ぶりに同所を訪れる機会があった。勝山支所の駐車場から農道を進むと、すぐにオムナグサを発見。その後、オムナグサは農道沿いに安和岳・古巣岳登山口まで点々と生えており、2015年よりも明らかに増加していた。ヤンバルハコベはシークワーサー畑の林床に健在であったが、オムナグサが増加しているので、次第に置き変わっていくのではないかと少し心配になった。

なお、勝山(2009)では同属のケネバリハコベ *D. villosa* Cham. & Schltdl.についても報告したが、ケネバリハコベについては会報246号(2019年8月1日)の1ページ目で紹介した。

文　献

勝山輝男, 2009. ヤンバルハコベとオムナグサ. 横浜植物会100年誌 横浜植物会の歴史, pp.341-344. 横浜植物会.
勝山輝男, 2019. 日光植物園に帰化したケネバリハコベ. 横浜植物会会報 第246号(Vol.50 No.3): 1.
門田裕一, 2017. ナデシコ科. 大橋ほか編, 改訂新版 日本の野生植物4., pp.108-127. 平凡社, 東京.

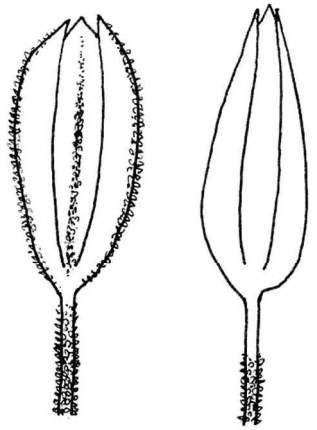

図　ヤンバルハコベ（左）とオムナグサ（右）の花蕾